

Public Interest Incorporated Foundation for Shiretoko Institute of Wildlife Management

設立財団ニュースレター

Vol. 11

2017 年 3 月 31 日発行

野生生物管理のスペシャリスト育成を目指して

代表理事 田中 俊次

当財団は、2013 年 1 月に一般財団法人としてスタートし、翌 2014 年 1 月には内閣府より公益財団法人の認定を受けました。以来、足かけ 4 年の歳月が経ちました。この間、定款に則った公益事業として、「知床自然大学院大学を開設する学校法人設立の準備及び知床自然大学院大学の設置或いは誘致の準備をする事業」を行い、更に「知床自然大学院大学が必要であることを広く世の中に訴えて賛同者を募る広報事業、およびそのための調査研究事業」等を実施してきました。「知床自然大学院大学」とは、「野生生物と人間社会との間に生じた様々な問題解決と共生のための新しい思想・技術を創出しその実践を担う専門家や研究者を育成する大学院に相当する高等教育研究機関」と定款で定義し、大学院大学に限らず幅広い高等教育機関の実現を目指しています。これまで実施してきた事業は、当ニュースレターでも紹介してきたとおりであり、逐一事業内容を紹介することは控えますが、主に広報事業としては種々の講演会、フォーラムを開催してまいりました。また、設立のための準備として、資金確保のための募金活動、認可申請準備のための大学院計画の策定と数度に亘る文部科学省への事前相談等を行い、設

立のためのステップを着実に整えてきました。計画策定は、12 名の専門家からなる計画策定専門委員会を中心に進め、社会的要請と必要な人材像、人材養成の方法や教育体制のあり方等の根本的な検討、さらには認可申請を想定した専門職大学院のカリキュラムや必要科目の検討等も行ってきたところです。

■ 一日でも早い目標達成に向けて

一方、設立のための資金集めは、当初予定していたようには進んでいないのが現状であります。この点は、全力を尽くしているつもりではありますが、責任者である私の努力不足であることは認めざるをえないと深く反省をしているところです。もちろん、永いデフレ状況の中で、日本経済、とりわけ北海道経済の景況が企業経営の収益を圧迫し、積極的な寄付行為への障害になっているのではないかと推察しているところでもあります。今後、この点についても活動方法を根本的に分析し、新たな方針を早急に立てて、一日でも早い目標達成に努力をしてまいり所存でもあります。

このように設立資金獲得の遅れのため、当初の開
設目標年度を延期し、昨年度には今後の活動方針の
根本的な検討を行いました。このことは昨年の
ニュースレター第 9 号で「設立財団の今後の方針に
ついて」でご報告したとおりです。そして、新たな
方針の下に計画策定専門委員会では専門職大学院大
学に限らず幅広い形態の教育機関と教育体制の検討
を行い、必要な教育プログラムの試行と実践計画を
昨年度から開始したところです。具体的には「知床
ネイチャーキャンパス 2016」を昨年 10 月に知床
国立公園内をフィールドに実施いたしました。

目指す教育機関の設立に向けては、定款でも謳っ
ているように、野生生物管理の専門家や研究者を育
成する大学院に相当する高等教育研究機関を設立・
設置・誘致する（定款第 3 条）ために、今後あらゆる
方法、形態を全力で模索し、考究していくことが
必要であると考えています。例えば、共通の目的と
理念をもつ既存大学との連携大学院や実習のための
フィールド（知床）の共同利用センター等々多種多
様な方向を訴究するために議論を深める必要がある
と考えており、実際、未だ具体化するところまでは
至っておりませんが検討の俎上に乗せつつあるとこ
ろでもあります。

■ 全国的な野生生物問題解決へ

いずれにせよ、今日わが国では全国的規模で「野
生生物の反乱」とも呼ばれるような、人間社会と野
生生物をめぐる問題が発生しています。農業被害だ
けでも約 200 億円ともいわれる損害があり、この

対策費用も同等の額が費やされながら目ぼしい成果
を得られていないとされているのが現状です。

これらの問題を抜本的に解決し、また、あるべき
自然と人間社会との共生を実現する研究・調査が必
要であり、また、これらの実践を担う人材の育成が
強く求められております。これを実現するためにも
「知床自然大学院大学」の早期設立は重要な課題と
なっています。

■ ネイチャーキャンパスを実施

そこで今、我々財団に課されていることは、今ま
で以上に知床自然大学院大学や野生生物管理の人材
育成の必要性を広く世の中に訴えて賛同者、理解者
を募ることが求められていると考えます。このため
に、わかりやすい教育計画、教育内容や育成する人
材像などを明確にすることが必要です。昨年実施し
た「知床ネイチャーキャンパス 2016」で示した教
育プログラムは、私共の目指す教育の中身を「見る
化」する意味をも持たせた事業です。実施にあたっ
ては、地元、斜里町にも説明を行い、ご理解を得た
中で計画し、知床財団の協力を受けて開催すること
が出来ました。

世界自然遺産知床は、野生生物の科学的保護管理
の先進地です。「知床ネイチャーキャンパス 2016」
では、この地を舞台に、この分野の第一線で活躍
する先生方（北大、岐阜大、東京農工大、北陸先端科
学技術大学院大等）が講師を務め、保護管理の実際
に関する講義や野外実習を体験する教育プログラム
を展開いただきました。参加者はこの分野の専門職



田中 俊次（たなか しゅんじ）

知床自然大学院大学設立財団代表理事。
東京農業大学名誉教授。経営学博士。
斜里町自治基本条例策定委員、斜里町知床
自然大学構想づくり協議会会長などを歴任。
知床の海別岳山麓に住んで 18 年になる。

を目指す学生、現在森林管理や保護行政を担う社会人、自然共生をベースに地域振興を考え実践している人など 22 名。全国から集まった受講生達は貴重な学びの体験をすることが出来た様です。当財団としてもこの事業を実施することによって、より分かりやすく、見える教育内容や養成する人材像を示すことが出来たと思います。我々が構想する人材育成を行う高等教育研究機関の中身がどのようなものであるかを理解していただくための実験的試行として、今回行った本事業の結果に対して、詳細な検討を加えて評価を行い、更に充実した内容で本年も第 2 回目を実施する予定であります。当面、これらの事業を継続していくことによって教育計画のさらなる充実と設立計画の理解者の拡大を図り、賛助会員や支援者の理解、協力につなげて行きたいと考えております。

いずれにせよ、全国的に野生生物と人間社会との軋轢が問題となっている昨今のわが国の現状については、環境省も言うように「専門的な知識を有する職員が都道府県等の行政機関に配置されることが重要である」ことはもちろん、地域団体や民間組織を含めた幅広い機関に専門職員が配置され、野生生物との共存策に取り組むことが急務となっています。さらに、当財団の構想にもとづく取り組みは、日本だけではなく、類似の問題に直面する国々の野生生物管理や鳥獣行政の将来を握る試金石となることはまちがいないと確信しています。私共は、その想いを強くもちつづけて構想実現に向けて歩みを進めていきたい。今もまさにエランビタール（生命の躍動）の光り輝く中、財団一同、更なる挑戦をしてみたい。

2017 年 秋 知床ネイチャーキャンパス 2017 開催予定

※詳しくは次号のニュースレターやホームページ、Facebook などでお知らせします

■ 昨年の様子 ■



■知床コラム

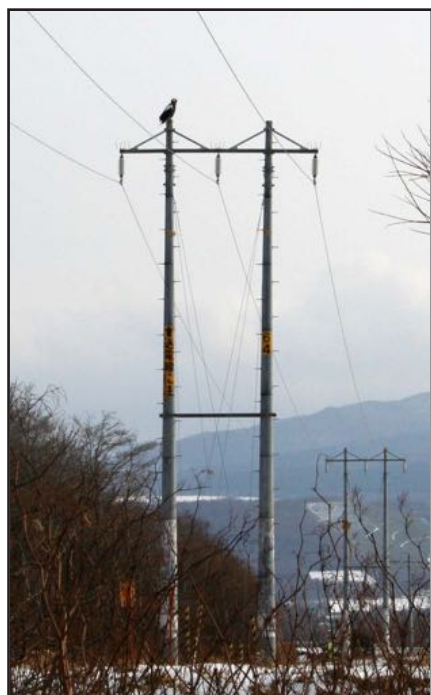
絶滅危惧種鳥類の生息環境回復へ向けて

業務執行理事 中川 元

知床をはじめ北海道東部は、絶滅が危惧される鳥類の重要な生息地になっています。シマフクロウは長年の保護対策の効果もあって、減少傾向に歯止めがかかり少しずつではありますが生息数の回復が見られています。オジロワシやタンチョウでは近年生息数の増加が続くようになりました。一方、絶滅の縁にあったシマフクロウを救ったのは人工巣箱の設置や給餌対策であり、タンチョウでは冬期の給餌活動が長年続けられた結果でした。高度成長期に行われた開発事業によって大きく失われた生息地が回復したわけではありません。シマフクロウの本来の生息地だった平野部を流れる河川流域の森林は失われ、タンチョウの繁殖地であった各地の湿原は大きく減少しました。

知床のシマフクロウの生息数は回復し、国内で繁殖するつがいの半数は知床半島に生息しています。しかし生息地は飽和状態で、これ以上の増加は困難です。知床は若いシマフクロウの供給地の役割を果たしていますが、知床から分散した個体が定着できる環境はほとんどありません。新たに定着できるのは餌となる豊富な魚類と豊かな河川畔林がある河川です。そして営巣できる樹洞を持つ大木が必要ですが、それは人工巣箱でも当面は代用できます。もちろん将来営巣木となる大木の育成保存は重要です。

道内のオジロワシの繁殖つがいの数も近年増加を続けています。知床でも増加傾向にありましたが最近では横ばいで、シマフクロウ同様飽和状態に近づいているかもしれません。知床に限らず、最近新たに確認される営巣地は農耕地や道路に近い林など、人の活動圏に接した場所が多くなっています。オジロワシが人の活動圏近くでも繁殖するようになった理由は、本来の生息地が飽和状態なことで、人里近くの川や湖沼で餌となる生物が回復してきたことが考えられます。



高圧送電線とオオワシ

また、公共工事などが絶滅危惧種の生息に配慮するようになったことも一因でしょう。これも幅広い環境保全策の成果といえるでしょう。しかし、これらの絶滅危惧種が危険な状態を脱したのかというと、そうではありません。

30 年前 100 羽を切るほどだったシマフクロウは、増加したといってもまだ 140 羽前後に過ぎません。冬期のタンチョウやワシ類など特定の地域に集中する種では感染症のリスクも高まります。人の活動圏近くに生息するようになったため、事故の発生を回避することも課題になっています。写真は 3 万 3 千ボルトの高圧電流が流れる送電柱に止まるオオワシです。この下を流れる川にはサケが上るため餌を求めるワシが集まり、感電事故が発生しています。生息地に接する電柱には感電防止対策が施されている場合が多いのですが、完全ではありません。海岸でシマフクロウの感電事故も発生しています。交通事故や風力発電施設への衝突事故、そして JR の根室線沿線や釧網線ではワシ類の列車衝突事故が多発するようになりました。列車に衝突するエゾシカが急増しており、その死体を餌として集まるワシ類が通過する列車に衝突死するのです。

餌の問題もあります。オオワシやオジロワシは越冬期の初期には道内各地のサケの遡上する河川に飛来し、サケの死体を餌としています。しかし、餌の不足する厳冬期には漁業活動から供給される魚類や観光給餌の魚類を求めて集まります。特定の場所に多数の個体が集中することで感染症や事故のリスクが高まります。オオワシやオジロワシはカモ類などの水鳥を餌とすることから、鳥インフルエンザの感染リスクも高いのです。

このように、絶滅危惧種の鳥たちは今も安心できる状況とは言えません。目指すのは「自然条件で安定的に生息出来る」状態に戻すことです。そのためには生息環境の復元が重要です。河川や湖沼、湿原の周辺に繁殖に適した森林を回復すること、移動分散に必要なコリドー（回廊）や中継地の環境を回復すること、そして自然の餌資源の回復です。河川工作物の改良による魚類の生息環境の復元、サケ科魚類の遡上量の増加によって給餌や人為的餌資源に頼らずに、安定的に生息できること、そして営巣に適した河畔林や湖畔林の回復によって安定した繁殖が継続できます。これら生息環境回復のための施策は保護関係の機関だけで行えるものではありません。対象の地域に関わる幅広い層、地元住民や生産者、行政や民間団体の理解と協力が不可欠です。幅広い連携体制のもとで計画を作り取り組んでゆくことが重要でしょう。



中川 元（なかがわ はじめ）

知床自然大学院大学設立財団業務執行理事。元知床博物館館長。長年鳥類の研究や保全活動に取り組み、国の希少野生動植物種保護推進員、シマフクロウやワシ類の保護増殖検討会委員も勤める。

■ 計画策定専門委員会報告

日時：平成 29 年 2 月 13 日（月） 9:00～13:00
場所：TKP 品川カンファレンスセンター（東京都）

出席者は委員 7 名、オブザーバー 1 名。知床ネイチャーキャンパス 2016 の報告と評価、2017 の開催内容と、人材養成プログラムや教育課程の策定、教育体制や教育機関の検討の進め方などを議論しました。



■ 平成 28 年度第 3 回理事会報告

日時：平成 29 年 3 月 12 日（日） 13:00～16:00
場所：斜里町産業会館 1 階会議室（斜里町）

決議事項 第 1 号議案「平成 29 年度（2017 年度）事業計画（案）」承認の件
第 2 号議案「平成 29 年度（2017 年度）収支予算（案）」承認の件（資金調達および設備投資の見込みを含む）
第 3 号議案「公印管理規程」制定の件
第 4 号議案「文書保存・管理規程」制定の件

報告事項 1. 代表理事・業務執行理事の業務報告
2. 「知床ネイチャーキャンパス 2016」の結果報告
3. 第 6 回計画策定専門委員会の結果概要報告
4. 賛助会員の加入状況・募金の状況
5. 活動助成金の申請について



知床自然大学院大学設立財団のおすすめ本紹介



どうすれば環境保全はうまくいくのか

宮内 泰介 編

新泉社 (2017 年) 2,592 円

環境保全策や問題解決のための合意形成に取り組む時、確かに社会は複雑でその変化は著しく、ステークホルダーがだれなのかすら流動的である。加えて自然界の変化も著しい。シカの増加、クマやイノシシの人里への侵入など、野生動物の変化は社会の変化を超えるとも思える早さで、かつ社会の変化も反映しているだけに様相は複雑である。

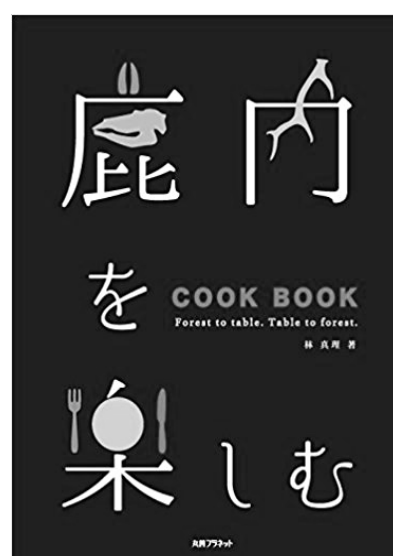
同編者による前著「なぜ環境保全はうまくいかないのか」(2013 年刊) 同様に、本書も全国の「現場」からの報告と提案が中心である。そして柔軟な目標や柔軟で順応的なプロセス、「学び」が生み出す価値、これらを重視した「順応的ガバナンス」が提唱されている。「人間と人間との関係を抜きにして人間と自然との関係を語ることはできない」という編者の視点からまとめられた本書は、環境保全に関わる多くの人の参考になるでしょう。(中川 元)

鹿肉を楽しむ COOK BOOK

林 真理 著

丸善出版 (2016 年) 1,400 円

全国で急増しているニホンジカ (北海道はエゾシカ)。肉や皮、角などを地域資源として有効活用しようという動きが広がっています。本書ではカレーやスープ、炒め物や煮込み料理など鹿肉のレシピはもちろん、レシピにまつわるエッセイ、栄養成分や部位の説明など、鹿肉に関する情報が幅広く紹介されています。当財団の計画策定専門委員、横山真弓・兵庫県立大学教授による捕獲と利用に関する文章も掲載されており、ワイルドライフマネジメントの視点も学ぶことができます。安全な鹿肉を美味しく食べることが、森の健康を守ることにもつながります。本書を活用し、鹿肉料理を楽しんでみませんか。(事務局)



■ ホームページをリニューアルしました



公益財団法人知床自然大学院大学設立財団
ホームページのトップページ

2016 年 10 月、当財団のホームページをリニューアルしました。デザインや構成を変更し、内容もより丁寧な説明を心がけました。ブログや活動報告で随時情報発信を行うほか、「どんな教育をするの？」というカテゴリには、当財団が目指す教育内容などを詳しく掲載しています。

今後も更新を重ね、当財団の情報発信に役立てていきたいと思いをします。引き続き、どうぞよろしくお願いいたします。

<http://shiretoko-u.jp>



■ 知床ネイチャーキャンパス 2016 の 実習動画を公開しています



2016 年 10 月 9 日、10 日に開催した「知床ネイチャーキャンパス 2016」の実習動画を作成し、You tube 上で公開しています。（当財団のホームページからご覧いただけます）

内容は

実習 1 「エゾシカ対策と森林復元」

実習 2 「国立公園利用調整地区の管理とエコツーリズム」

実習 3 「森・川・海のつながりと河川工作物改善」

3 本とも 2 分半程度の長さにまとめています。ぜひご覧いただき、知床をフィールドとした実習の雰囲気などを感じていただければと思います。

なお知床ネイチャーキャンパスは 2017 年度も開催予定です。引き続き、ご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

実習動画を掲載したページはこちらから ▼

<http://shiretoko-u.jp/2017/03/06/jissyuudouga/>



知床自然大学院大学設立財団は、 活動を支援してくださる **賛助会員、寄附金** を募集しています

■賛助会員とは

この財団の目的に賛同する個人・団体・法人が会費を通じて支援するものです。

■会員の年会費

個人会員：5,000 円

団体会員：10,000 円

法人会員：20,000 円

法人特別会員：100,000 円

※年度ごとの納入となります。

■加入申込み方法

「申込書」と「郵便振替用紙」をご使用ください。これらは当財団ホームページからプリントアウトできます（入金 は 右記口座への入金でも受付しています）



知床自然大学院大学設立財団ホームページ
賛助会員・寄附金募集ページ

■賛助会員の特典

当財団のニュースレターや絵はがき、講演会やネイチャーキャンパス等の案内情報を優先的にお送りします。

■寄附金について

寄附金も随時募集しています。

賛助会員加入同様にお申し込みください。

■主な入金口座について

ゆうちょ銀行 記号 19940 (普) 10138691

(※他の金融機関から 店名九九八 番号 1013869)

北洋銀行斜里支店 店番 452 (普) 3119440

北海道銀行斜里支店 店番 904 (普) 0530326

網走信金斜里支店 店番 003 (普) 0284957

大地みらい信金羅臼支店 店番 003 (普) 1072873

オンライン寄付サイト「Give One」
ソーシャルグッドプラットフォーム「gooddo」からもご支援いただけます



設立財団ニュースレター 第 11 号

発行 公益財団法人知床自然大学院大学設立財団

〒099-4117 北海道斜里郡斜里町青葉町 28-10

TEL 0152-26-7770 FAX 0152-26-7773 E-mail sizendaigaku@wine.plala.or.jp

Web <http://www.shiretoko-u.jp>

発行日 2017 年 3 月 31 日